

別紙1-1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 坪田 祐基

論 文 題 目

完全主義と選択的注意バイアスとの関連の検討

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 石井 秀宗

名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授 金子 一史

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授 溝川 藍

## 論文審査の結果の要旨

完全主義は、完全性への希求であり、完全主義者とは、生活のあらゆる側面で完全でありたいと思う人々である。完全主義は、様々な心理・生理的な問題との関連が指摘されている。完全主義者がどのように不適応に陥るのかについて、Sharan, Cooper, & Fairburn (2002)は、臨床的な観察から、完全主義者が選択的注意バイアスをはじめとする特有の認知スタイルを有することを示唆した。具体的には、完全主義者は、自らが設定した過度に高い基準に照らし、結果だけでなく過程も含めた様々な失敗を選択的に拾い上げ、多少の成功は無視する。そして、知覚された失敗を引き金に、「自分は価値のない人間だ」といった強い自己批判を繰り返す。そして、それを取り戻すように更に高い基準を設定し、その追求に依存することによって、完全主義傾向を維持し、様々な問題を呈することになる。このプロセスの中で、選択的注意バイアスは、鍵となる失敗の知覚に強く関わっており、不適応の根幹をなしていると考えられる。そのため、完全主義者の持つ選択的注意バイアスの特徴を実証的に明らかにすることによって、完全主義者がいかにして不適応に陥るかを学術的に解明することにつながる。また、完全主義が不適応を生み出す認知プロセスへの臨床的なアプローチに対する示唆を与えることができる。先行研究では、Frost et al. (1997)が自己報告による調査を行っているが、選択的注意バイアスが自動的で、無意識的なものであるという性質 (Mathews, 1990)を有していることから、選択的注意バイアスを上手くとらえられていない。そのため、完全主義者の選択的注意バイアスを精緻にとらえるためには、統制された実験室における認知行動実験パラダイムに基づいた測定を用いることがより適切であると考えられる。しかし、このことに取り組んだ研究はほとんどなく、数少ないそれらの研究も、問題点を抱えている。そこで、本研究では、それらの問題点を解決し、完全主義と選択的注意バイアスの関連をより精緻にとらえ、検討することを目的とした。

第 1 章では、完全主義の定義と、関連する心理・生理的問題について紹介した。次に、完全主義が適応的・不適応的な両側面を持つ多次元的なものであることから、完全主義が適応/不適応へといたるプロセスについて検討する必要性を論じた。そのアプローチとして、本論文では、Shafraan et al. (2002)が臨床的な観察から示唆した「選択的注意バイアス」について検討することとした。そして、完全主義と選択的注意バイアスとの関連を検討した先行研究を概観し、特に認知行動実験パラダイムを用いた研究の問題点として、用いられている課題が適切ではないこと、用いられた刺激語がネガティブなもののみに限られていること、性差に関する検討がなされていないことの 3 点を指摘し、これらの問題点を解決する研究が必要であることを述べた。その上で、本論文の構成を示した。

## 論文審査の結果の要旨

第2章では、第1章で述べた問題点を解決するために、研究1として、完全主義と成功関連語・失敗関連語への選択的注意バイアスとの関連を、ドット・プローブ課題を用いて検討した。また、性別によって関連が異なるかも検討した。その結果、男性でのみ、自己志向的完全主義と失敗関連語への選択的注意バイアスとの間、高目標設置と失敗関連語への選択的注意バイアスとの間、完全性追求と成功関連語・失敗関連語への選択的注意バイアスとの間に正の関連が見られた。一方、女性では関連が見られなかった。この結果から、男性の完全主義者は成功や失敗に対し、選択的注意バイアスを示すが、女性の完全主義者は選択的注意バイアスを有するわけではない可能性が示唆された。一方、研究1で用いられた刺激語が女性にとって馴染みが浅いと考えられる、課題場面における成功・失敗に関連する単語に偏っていたために、このような結果が見られた可能性も示唆された。

第3章では、研究1の結果を受け、研究2として、より女性に親和的であると考えられる対人場面における成功関連語・失敗関連語への選択的注意バイアスと完全主義との関連を検討した。選択的注意バイアスを測定するのに用いられたのは、研究1と同様に、ドット・プローブ課題であった。その結果、男性、女性のいずれでも関連が見られず、完全主義者は対人場面における成功・失敗に対して選択的注意バイアスを行うわけではないことが示唆された。

第4章では、まず、研究1・2で用いられたドット・プローブ課題の問題点について議論された。具体的には、注意における定位過程（対象に注意を向ける過程）と解放過程（対象から注意をそらす過程）を弁別して測定することができず、両者を混同してしまうという点である。Posner (1980)の空間的注意のモデルでは、注意における定位過程と解放過程は区別され、それぞれ異なる過程であるとされている。また、それぞれ異なる脳部位の活動と関連していることも指摘されている (Posner & Petersen, 1990)。そこで、研究3では、選択的注意バイアスを定位バイアス・開放困難バイアスに弁別して測定できる修正ドット・プローブ課題を用いて、完全主義とこれらのバイアスとの関連をより精緻に検討した。その結果、男性では、高目標設定と失敗関連語への解放困難バイアスとの間、失敗懸念と失敗関連語への定位バイアスとの間、行動疑念と成功関連語への定位バイアスとの間に正の関連が見られた。そのため、完全主義の側面によって、定位バイアスか開放困難バイアスのいずれかとのみ関連していることが示唆された。一方、女性では完全主義と定位・解放困難バイアスとの関連が見られず、女性の完全主義と選択的注意バイアスとが関連していないことの蓋然性が高まった。

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

第5章では、以上の研究を総括し、総合考察として、本論文で明らかにされた結果を整理し、本論文の意義や限界点、今後の課題について、実証的アプローチ、性差、完全性の領域の3つの観点から議論を行った。具体的には、本論文で用いたドット・プローブ課題や修正ドット・プローブ課題の有用性を述べた上で、本論文の結果が、Shafran et al. (2002)の臨床的な観察による主張をある程度支持しながらも、一部異なる部分が見られたことから、実証的に完全主義と選択的注意バイアスとの関連を検討したことの意義が示された。また、完全主義と選択的注意バイアスとの関連における性差が見られたのは、新奇な結果であった。そのため、今後、性別と共変しながら、完全主義と選択的注意バイアスとの関連を調整する変数を特定する必要があることが示唆された。そして、刺激語の馴染み深さが個人によって千差万別である可能性があり、より多様な刺激語を用いた研究の必要性がある一方で、その困難さについても議論された。さらに、本論文の結果から、今後、学業領域にのみ完全性を見出すなどの領域固有の完全主義について検討することの重要性について議論した。

以上の論文の内容に対して、審査委員から次のような質問及び指摘がなされた。

- ・成功関連語に対する選択的注意バイアスがポジティブ、失敗関連語に対する選択的注意バイアスがネガティブとの考察を行っているが、そうはならない文脈もあるのではないか。
- ・不適応に影響するのは、完全主義以外の要因も数多く考えられる。
- ・性差に関する検討が必ずしも十分とは言えない。
- ・教育心理学等の領域における本研究の位置を、もう少し明確にしてほしい。

これらの質問や指摘に対し、申請者は本論文・研究の限界及び今後の課題について十分かつ適切に認識しており、概ね妥当な応答がなされた。

本論文は、完全主義と選択的注意バイアスとの関連について、先行研究における課題の問題、刺激語の問題、性差に関する問題について、1つひとつ丁寧に克服する実験研究を積み重ね、精緻な結論を導いている点に、研究の意義と質の高さがある。本研究で得られた知見は、完全主義者が不適応に陥るのを抑制する一助になり得るものであり、理論面のみならず実践的な有用性も認められる。

よって、審査委員会は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文の審査結果を「可」と判定した。